東栄町川角集落におけるシカ捕獲の取組

～試験場が開発「立木ネット囲いわな」によるシカ捕獲の取組事例～

大羽　智弘（新城設楽農林水産事務所農業改良普及課）

【2024 年 12 月掲載】

【要約】

農業改良普及課は、2022 年度、2023 年度の２年にわたり、北設楽郡東栄町川角集落において、愛知県農業総合試験場が新たに開発したシカ捕獲用わな「名称：立木（りゅうぼく）ネット囲いわな」によるシカの捕獲に取り組んだ。2022 年度は、わなの中まで誘引できたが、捕獲直前に来なくなり、捕獲に至らなかった。2023 年度は、誘引方法、わなの設置場所、捕獲の時期、トリガーを設置するなど刷新した結果、同時に親子のシカ２頭を捕獲することができた。

１　はじめに

北設楽郡東栄町は中山間地域に位置し、野生鳥獣による農作物の被害が多い。特にニホンジカ（以下「シカ」に省略）による被害は、年々増加傾向にある。対策として集落を囲むように侵入防止柵は設置されているが、集落の真ん中を通る道路からの侵入を防ぐのは困難である。

農業改良普及課は、2021 年度から東栄町川角集落を重点課題の対象として位置付け、集落住民とともにシカ捕獲を含めた鳥獣害対策の支援をしている。

今回は 2022 年度、2023 年度に取り組んだ、「立木ネット囲いわな」によるシカ捕獲の取組事例を紹介する。

２　「立木ネット囲いわな」とは？

（１）わなの名称

右の写真のように、“林内の立木を支柱としてネットで囲ったわな”である。

写真１　立木ネット囲いわな

（２）わなの設置に必要な資材

使用するネットは、「防鹿（ぼうろく）ネット」と呼ばれ、林業で植林した苗木をシカの食害から守るために使用されるものである。ネットの大きさは、幅２ｍ×長さ 24m、重さは４kg 程度と軽量である。２枚のネットを１ｍほど重ねて幅を３ｍにしている。

この他、必要な主な資材は、ハンモックベルト、太さ１cm 程の PE ロープ、カラビナ、ペグなどである。一般的な囲いわなや箱わなは、金属製であることから非常に重く、特に山林内に運ぶのは容易ではない。しかし、この罠は軽量な素材で作られているので、可搬性があり、状況に応じた移設も容易である。ただし、イノシシが誘引されると非常

に危険であるため、餌の選定には注意が必要である。

（３）わな設置場所の選定

わなを設置するには６～８本程度の立木が必要である。立木は、上から見て正六角形に近い配置だと、わなの出来上がりがきれいな円形になる。わなの大きさは立木間の間隔で決まるが、ネットの長さ（24m）を考慮すると、わなの直径が７m程度がよい。

シカの生息密度が低い場所や、誘引餌を摂食しない場所にわなを設置しても捕獲できないため、設置場所の選定は最重要である。まずは、候補地に餌を置き、1 週間程度トレイルカメラで観察をする。

（４）わなの設置手順

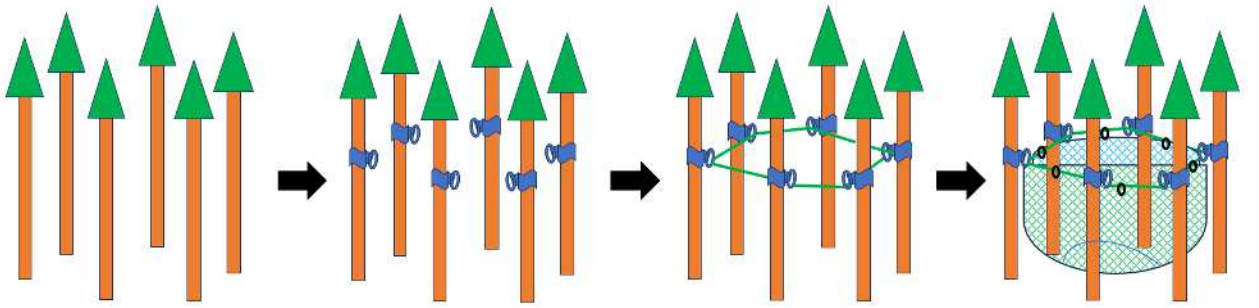
大まかなわなの設置手順は次のとおりである。

① 支柱とする立木を決める。

② 立木の同じ高さ(今回は２m70cm に取付)に、ハンモックベルトを巻き付け固定する。

③ 立木に取り付けたハンモックベルトの先端についたカラビナにロープを通して１周させる。ネットを吊るためのロープを張る。

④ カラビナでロープにネットを吊す。



①わなに適した立木の配置　下図は上方から見た配置

②高さ２m70cmくらいの位置にハンモックベルト取り付ける

③ハンモックベルトにロープを通し立木にも巻き付ける

④ロープにネットを吊るし円筒状に囲む

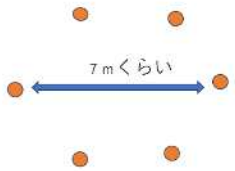


図１　立木ネット囲いわなの設置手順

（５）捕獲までの手順

①わなの周囲にヘイキューブを給餌し、自動撮影カメラでシカの出没とヘイキューブを食べるか否か観察する。ヘイキューブとは、家畜用の飼料でマメ科牧草を固めたものである。ヘイキューブはシカ以外の動物は殆ど摂食しないため、シカを選択的に誘引しやすい。(写真２)。

ネットの下方１か所をひもで吊して 30cm 程持ち上げ、わなの入り口を作る。

②シカがわなの奥まで侵入するように数日間かけて誘引する。まず、写真３のようにわな周

写真２　えさに使うヘイキューブ

※ヘイキューブとは牧草を細切りして圧縮成型した角形の乾草（アルファルファ）で家畜の飼料として広く利用されている。

辺に撒いたえさを食べる段階であれば、ヘイキューブを入り口の下のみに給餌する。シカの頭がネットに触れても気にせずえさを食べる程馴れてきたころを見計らい、最終的にはヘイキューブをわなの中のみに給餌する。
③警戒心が強い個体は、なかなか中に入らないが、ヘイキューブに嗜好性が高い個体は、徐々に中に入ってえさを食べるようになる。
④トレイルカメラでシカが中に入ることを確認したら、トリガーを設置し捕獲体制に入る。トリガーとは引き金や起動装置という意味で、ここではわなの中に張ったひもにシカが触れると、入り口のネットを持ち上げているひもが降り、入り口が塞がるためシカが出られなくなる仕掛けである。

写真３　わな周辺のえさを食べに来たシカの親子

３　川角集落で取り組んだ鳥獣害対策

（１）立木ネット囲いわなによるシカ捕獲の取組（2022 年度）

2022 年度と 2023 年度の２年間で立木ネット囲いわなによるシカの捕獲に取り組んだ。2022 年度は侵入防止柵の集落側の雑木林にわなを設置した。設置前に、米ぬかを撒いてシカが来るかどうかをトレイルカメラで確認したところ、シカは来るもののイノシシも誘引されたため、イノシシも好む米ぬかを止めヘイキューブに切り替えた。その後、イノシシが来なくなったことが確認できたため、７月に立木ネット囲いわな設置した。しかし、気温が低くなる 11 月までは、集落内に雑草など他に食べるものがあるため、草の少ない立木ネット囲いわな周辺への出没頻度は低かった。シカが多く出没するようになったのは 11 月以降で、12 月には 1 日に２～３回入るようになった。しかし、12 月下旬にネットの高さを下げ捕獲体制に入ったが、その頃からシカが姿を見せなくなったため、この年は捕獲に至らなかった。

（２）立木ネット囲いわなによるシカ捕獲の取組（2023 年度）

2023 年度は、前年度の取組で明らかになった問題点を改善しながら、シカの捕獲に取り組んだ。
①わなの設置場所は、侵入防止柵の集落側ではなく、外側（山林側）とした。
②捕獲時期は、シカの活動が活発化する 10 月から 12 月とした。
③誘引用のえさは、ヘイキューブのみとした。
④前年度は使用しなかったトリガーを設置した。

写真４　立木ネット囲いわなで捕獲した２頭シカ

その結果、写真４のとおり、シカの親子２頭を捕獲することができた。なお、捕獲したシカは、猟友会の会員により適正に止め刺しされている。

集落での鳥獣害対策は、特定の個人だけが取り組む体制ではうまくいかない。関係者が協力して実施する集落ぐるみの取組が望ましい。集落ぐるみの体制作りを支援するため、農業改良普及課は「捕獲補助者制度」の活用を提案した。この制度は、狩猟免許を有さない者でも講習を受けることで餌やりや罠の管理が出来るようになる制度である。2023 年に東栄町が講習会を開催し、農業改良普及課が講師を務めた。これにより、集落住民が捕獲補助者となり、わな免許を有しない者であっても、わなの見回りや餌やりが出来るようになった。

写真５　講習を受ける集落住民達

４　立木ネット囲いわなの普及と課題

東栄町では、わな講習を受け捕獲補助者となった集落住民が協力して、シカが出没する場所にわなを移設する等して活用している。従来の囲いわなは、重量が重いため一度設置すると移設は困難であるが、立木ネット囲いわなは容易に設置できる点が長所である。

他地域への普及状況としては、2023 年度までの東栄町での取組結果を受け、2024 年９月に新城市作手黒瀬地区において新たに設置された。そこでは 11 月末現在、３頭捕獲されている。

猟銃免許を持つ人がメンバーにいない場合止め刺しをどのように行うかなどが課題である。

Copyright (C) 2024, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.